

平田 秀

要旨

本発表では、三重県尾鷲方言の人名アクセントと呼びかけイントネーションについて扱う。同方言のアクセント体系は、3種の式（文節全体が担う音調的要素）と下げ核（それぞれの拍が担う強勢的要素）によって記述される多型アクセント体系である。同方言の人名アクセントは、以下の（1）（2）に大別される：（1）下げ核による下降が生じる人名、（2）下げ核による下降が生じない人名。同方言の呼びかけイントネーションの概略は、以下の（3）（4）の通りである：（3）下げ核による下降が生じる人名を呼びかける場合、ピッチレンジが大きくなる。（4）下げ核による下降が生じない人名を呼びかける場合、下降が生じる。（4）の下降が生じるパターンは、日本語諸方言の呼びかけイントネーションについて扱った先行研究でも言及されているものであり、通方言的に下降音調が呼びかけと結びつきやすいことが示唆される。

1. はじめに

本発表では、三重県尾鷲市尾鷲方言の人名アクセントと呼びかけイントネーションについて扱う。尾鷲市は、三重県南部に位置する人口約 1.7 万（2020 年 10 月 1 日現在・尾鷲市ウェブサイト <https://www.city.owase.lg.jp/cmsfiles/contents/0000004/4231/R2.10.pdf> 2020 年 10 月 15 日閲覧による）、面積約 193 km²の市である。金田一春彦（1975 [1959]）、上野善道（1987）などの諸先行研究により、三重県北中部では京都方言や大阪方言と系統を同じくする方言が話されていること、尾鷲市や熊野市など三重県南部地域では県北中部の諸方言と系統が異なる方言が話されていることが指摘されている。



図 1 三重県尾鷲市

尾鷲市は 1954 年、北牟婁（きたむろ）郡尾鷲町・須賀利（すがり）村・九鬼（くき）村・南牟婁（みなみむろ）郡北輪内（きたわうち）村・南輪内（みなみわうち）村が合併して成立した（『尾鷲市史 下巻』：652）。本発表における「尾鷲方言」とは、旧尾鷲町にあたる地区で話される方言を指す。

* 本発表は、日本学術振興会科学研究費補助金「紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言アクセント類型論の形成」（若手研究・課題番号 18K12362）の助成を受けた現地調査によるものである。

本発表の音声データは、2018年12月・2019年12月に尾鷲市内で実施した現地調査による、1950年代生まれの女性話者によるものである。

第2節で、尾鷲方言のアクセント体系について概観する。第3節で、尾鷲方言の人名アクセントについて述べる。第4節で、尾鷲方言の呼びかけイントネーションについて扱う。第5節はまとめである。

2. 尾鷲方言のアクセント体系

尾鷲方言のアクセント体系は、以下の(1)(2)の通りである(平田秀 2020: 15)。

(1) 下げ核をもつ。

下げ核：次の拍を下げる働きを持つ(上野 1992: 11)。それぞれの拍が担い手となる要素である。レキシコンに下げ核の有無と、有核の場合何拍目に置かれるかの情報が入っている。拍とは上野(2006: 2)で述べられているアクセントの長さを構成する単位を指し、尾鷲方言ではモーラに一致する。

(2) α 式(上昇式)・ β 式(2拍卓立上昇式)・ γ 式(平進式)の3式の対立をもつ。

式：(1)で述べた音調の下がり目を規定する下げ核とは別に、文節全体の音調の方向を定める働きを持つ(上野 1987: 60)。文節全体が担い手となる要素である。すべての自立語は α 式・ β 式・ γ 式のいずれかの式をもつ。 α 式・ β 式・ γ 式の名称は発表者によるものである。

(2)の3式の対立をもつ日本語方言の報告は、これまで香川県観音寺(かんおんじ)市伊吹島(いぶきじま)方言の1例のみであった(上野 1985)。尾鷲方言についての先行研究である金田一(1975 [1959])、上野(1987)では、(2)の α 式・ γ 式にあたる2式のみ記述されている。 β 式は発表者による2010年以降の現地調査で存在が新たに確認された式である。

(2)の3式は、(3)に示す特徴をもつ。(4)に4拍語の語例を示す。(4)中の「[」は拍間の上昇を、「]」は拍間の下降を表す。「[」が左端にある場合は、高く始まることを示す。「n型」は、「n拍目が下げ核を担う型」を表し、「0型」は、下げ核のない無核型を表す。また、(4g)については、 γ 式で2拍目が下げ核を担う4拍語が差別等の意図をもって用いられうる語1例のみが得られているため、「×」を用いて表記した。

(3) 尾鷲方言の3式の特徴(平田 2020: 15-23)

a. α 式(上昇式)：

文節は低く始まる。下げ核のあるときは、下げ核を担う拍の左で上昇し、その後下げ核の働きによって下降が起こる。下げ核のないときは文節の末尾拍の左で上昇する。1拍目が下げ核を担う場合、文節は高く始まる。

b. β 式(2拍卓立上昇式)：

下げ核のあるときは、下げ核を担う拍に先行する拍の左で上昇し、その後下げ核の働きによって下降が起こる。2拍目が下げ核を担う場合、文節は高く始まる。

c. γ 式(平進式)：

単独形では高く始まる。複雑な「連読変調」の現象がみられる。

(4) 尾鷲方言の4拍語の例 (平田 2018a: 87)

語	型	-は	この-
a. 友達	α 0型	トモダチ[ワ]	コノトモダ[チ]
b. カプセル	α 1型	[カ]プセルワ	コノ[カ]プセル
c. 絵葉書	α 2型	エ[ハ]ガキワ	コノエ[ハ]ガキ
d. かみそり	α 3型	カミ[ソ]リワ	コノカミ[ソ]リ
e. 目印	β 2型	[メジ]ルシワ	コノ[メジ]ルシ
f. いちじく	β 3型	イ[チジ]クワ	コノイ[チジ]ク
g. ××××	γ 2型	[××]××ワ	コ[ノ××]×× ~ コ[ノ]××]××
h. 紫	γ 3型	[ムラサ]キワ	コ[ノムラサ]キ ~ コ[ノ]ムラサ]キ

(3a) (3b) で述べた通り、1拍目が下げ核を担う α 式の文節と、2拍目が下げ核を担う β 式の文節は高く始まる。「高く始まる」という点で共通する γ 式の区別が問題となるが、 α 式・ β 式と γ 式では、「この-」が先行した際のふるまいが異なる。

(5) 尾鷲方言の4拍名詞 (抜粋)

語	型	-は	この-
b. カプセル	α 1型	[カ]プセルワ	コノ[カ]プセル
e. 目印	β 2型	[メジ]ルシワ	コノ[メジ]ルシ
g. ××××	γ 2型	[××]××ワ	コ[ノ××]×× ~ コ[ノ]××]××
h. 紫	γ 3型	[ムラサ]キワ	コ[ノムラサ]キ ~ コ[ノ]ムラサ]キ

「この-」に γ 式の文節が後続した場合、(5g) (5h) の通り、コ[ノ と「この-」の2拍目の左で上昇が起こる。それに対し、「この-」に α 式・ β 式の文節が後続した場合には、(5b) (5e) の通り、「この-」内部での上昇が起こらない。単独形で高始まりとなる語がどの式をもつかは、「この-」を先行させることで判別が可能になる。(3c) で述べた通り、尾鷲方言においては、 γ 式の文節が関わる複雑な「連続変調」の現象がみられる (平田 2020: 19-23) が、本発表の論旨には関係しないため、記述を割愛する。

以上、尾鷲方言のアクセント体系について概観した。次の第3節で、尾鷲方言の人名アクセントについて述べる。

3. 尾鷲方言の人名アクセント

尾鷲方言の人名アクセントは (6) に示す特徴をもつ。中井幸比古 (2002) に掲載の人名を参考に、2拍・3拍の姓 389 項目、2拍~6拍の名 102 項目からなる調査票を作成し、読み上げ形式で調査を実施した。

(6) 尾鷲方言の人名アクセントは、下降の有無と下降の位置の対立をもつ。

(7) に尾鷲方言の人名アクセントの語例を示す。斜線がひかれている箇所はアクセント体系上存在し

えない型を、「-」はアクセント体系上存在しうるが、語例が得られなかった型を表す。

(7) 尾鷲方言の人名アクセント語例

拍数	下降あり				単独形で下降なし	
	$\alpha 1$ 型	$\alpha 2$ 型	$\alpha 3$ 型	$\alpha 4$ 型	$\alpha 0$ 型	$\gamma 3$ 型
2 拍	[リ]エ [ケン]	-	/	/	オ[ダ] ク[ボ]	/
3 拍	[ナ]オト [タ]ロー [シ]ンヤ	カ[オ]リ ハ[ル]エ	-	/	ナオ[ミ] イー[ダ] カノ[ー]	[タナカ] [オータ]
4 拍	[コ]ースケ [シュ]ンスケ	タ[カ]ヒロ ヒ[デ]アキ	ケン[イ]チ ケン[ゾ]ー	-	ケンサ[ク] トヨゾ[ー] コーヘ[ー]	-
5 拍	[ケ]ンジロー [コ]ージロー	ナ[オ]ジロー タ[イ]チロー	キク[タ]ロー ヒコ[タ]ロー	-	キクノス[ケ] コーノス[ケ]	-
6 拍	-	-	トク[サ]ブロー トモ[サ]ブロー	ケンイ[チ]ロー コーイ[チ]ロー	カンザブロー[ー] ショーザブロー[ー]	-

(7) に示した通り、2 拍の人名では下降の有無の対立が、3 拍～6 拍の人名では下降の有無と下降の位置の対立がみられた。なお、4 拍 $\alpha 1$ 型と 5 拍 $\alpha 1$ 型の人名は、2 拍目が特殊モーラである例のみが得られた。

続く第 4 節で、尾鷲方言の呼びかけイントネーションについて扱う。

4. 尾鷲方言の呼びかけイントネーション

本節では、尾鷲方言の呼びかけイントネーションに見られる特徴について述べる。

溝口愛 (2018: 430) における調査項目と同様に、(8a) ～ (8i) の 9 つの状況を設定した調査票を作成し、名前を呼びかける際のイントネーションを調査した。

(8) 呼びかけイントネーション調査にあたっての状況設定 (カッコ内は実際の発話の一例)

- a. 注意をひく (○○、電話やで。)
- b. 責める (○○、どうしてそんなことしたん！)
- c. 存在確認 (○○、おる？)
- d. 葬式 (○○、どうして死んじゃったん？)
- e. 遠くにいる (おーい、○○！)
- f. 目の前にいる (なあ、○○！)
- g. 久しぶりに会った (○○、久しぶり。)
- h. 心配している (○○、大丈夫？)
- i. 願いをする (○○、頼みたいことあるんやけど。)

(9) に示す人名 34 種それぞれについて、上記 (8a) ～ (8i) の 9 つの状況を設定した全 306 項目からなる調査票を作成し、読み上げ形式で調査を実施した。

(9) 呼びかけイントネーションを調査した人名

2 拍：[ア]イ、[リョ]ー

3 拍：[シ]ンヤ、[リョ]ーコ、ハ[ル]エ、ハ[ジ]メ、ハル[オ]、ナオ[ミ]、[オー]タ、[タナ]カ

4 拍：[コ]ースケ、[シュ]ンスケ、ヒ[ロ]ノリ、ヒ[デ]アキ、ケン[ゾ]ー、サブ[ロ]ー、エーサ[ク]、ケンサ[ク]、コーヘ[ー]、トヨゾ[ー]

5 拍：[ケ]ンジロー、[ダ]イジロー、マ[ツ]ゴロー、ナ[オ]ジロー、キク[タ]ロー、ヒコ[タ]ロー、キクノス[ケ]、ケンタロ[ー]

6 拍：トク[サ]ブロー、トモ[サ]ブロー、ケンイ[チ]ロー、コーイ[チ]ロー、カンザブ[ロ]ー、ショーザブ[ロ]ー

尾鷲方言の呼びかけイントネーションは、(10) に示す通りの特徴をもつ。(10) の表内の「[]」は先行する拍で拍内下降が起こることを表す。太字はピッチレンジが大きいことを示す。また、「。」を用いて平叙文であることを、「！」を用いて呼びかけを行っていることを表す。

(10) 尾鷲方言の呼びかけイントネーション

- a. 下降のある人名を呼びかける場合、ピッチレンジが大きくなる。
- b. 下降のない人名を呼びかける場合、下降が起こる。
 - b-1. 最終拍が自立拍の場合、最終拍で拍内下降が起こる。
 - b-2. 最終拍が特殊拍の場合、最終拍で拍内下降が起こるパターン (b-2-1) と、最終音節の 1 拍目と 2 拍目の間で下降が起こるパターン (b-2-2) の両方がみられる。

	平叙文	呼びかけ
(10a)	[シ]ンヤ。	[シ] ンヤ！
(10b-1)	ハル[オ]。	ハル[オ]]！
(10b-2-1)	コーヘ[ー]。	コーヘ[ー]]！
(10b-2-2)	ケンタロ[ー]。	ケンタ[ロ]ー！

図 2~5 に、(10a) の例として[シ]ンヤ の平叙文と呼びかけのピッチ曲線を、(10b) の例としてハル[オ] の平叙文と呼びかけのピッチ曲線を示す。

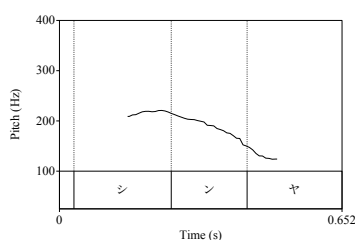


図 2 [シ]ンヤ。(平叙文)

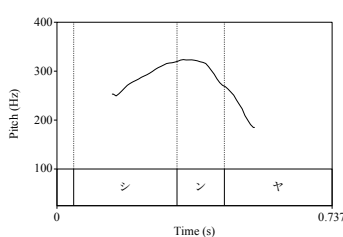


図 3 **[シ]**ンヤ！（呼びかけ文）

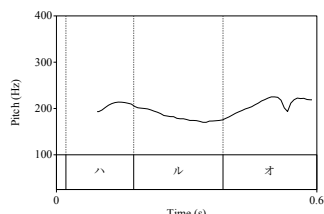


図 4 ハル[オ]。(平叙文)

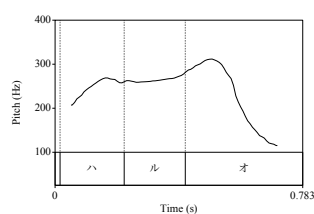


図 5 ハル[オ]]！（呼びかけ文）

(10) で述べた通り、尾鷲方言における呼びかけイントネーションには、音調の下降が大きく関わっている。日本語諸方言の呼びかけイントネーションを扱った先行研究として、鹿児島県甕島（こしきじま）方言と鹿児島方言の呼びかけイントネーションについて扱った窪菌晴夫（2018）、東京方言を対象とした溝口（2018）、宮崎県小林（こばやし）方言を対象とした平田（2018b）が挙げられるが、これら先行研究でも呼びかけと音調の下降に連関がみられることが指摘されている。甕島方言・鹿児島方言は単語の長さにかかわらず2つのアクセント上の対立をもつ2型アクセント、東京方言はn拍語にn+1種のアクセント上の対立をもつ多型アクセント、小林方言はアクセントの対立をもたない1型アクセント、尾鷲方言は式の対立をもつ多型アクセントと、諸先行研究と本研究で扱う方言のアクセント体系はさまざまである。その一方で前述の4方言は呼びかけと音調の下降に連関をもつ点で共通しており、注目される点である。

5. まとめ

本発表では、尾鷲方言の人名アクセントと呼びかけイントネーションについて述べた。同方言の人名アクセントは下降の有無と下降の位置の対立をもつこと、呼びかけイントネーションにおいて音調の下降が大きく関わることを示した。この呼びかけと音調の下降の連関は、呼びかけイントネーションについて扱った諸先行研究でも指摘されている点であり、通方言的な特徴であることが示唆される。さらなる別の方言でも同様の特徴がみられるかは、今後の研究課題である。

参考文献

- 上野善道（1985）「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2: 75-179.
- 上野善道（1987）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（2）」『日本学士院紀要』42-1: 15-70.
- 上野善道（1992）「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 尾鷲市史編纂準備会編（1969）『尾鷲市史 下巻』.
- 金田一春彦（1959）「熊野灘沿岸諸方言のアクセント」¹『名古屋大学文学部十周年記念論集』.
- 金田一春彦（1975）『日本の方言—アクセントの変遷とその実相』教育出版株式会社.
- 窪菌晴夫（2018）「鹿児島方言と甕島方言の呼びかけイントネーション」『日本言語学会第157回大会予稿集』432-437.
- 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版.
- 平田秀（2018a）「三重県尾鷲方言の外来語アクセント」『東京大学言語学論集』40: 85-101.
- 平田秀（2018b）「小林方言の呼びかけイントネーション」『日本言語学会第157回大会予稿集』438-441.
- 平田秀（2020）『三重県尾鷲方言のアクセント研究』ひつじ書房.
- 溝口愛（2018）「東京方言の呼びかけイントネーション」『日本言語学会第157回大会予稿集』426-431.

¹ 金田一（1975）に「熊野灘沿岸諸方言のアクセント 1. 北牟婁郡の部」のタイトルで再録。本論では金田一（1975 [1959]）として引用する。